

# 翻刻 渡部寛一郎日記2 (明治三十一年・三十二年)

渡部寛一郎文書研究会

(要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大國由美子・大原俊二・

居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎)

## 摘要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解説・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記第二冊(明治三十一年・三十二年)の手帳の前半部分を翻刻紹介する。渡部寛一郎が、彼が校長を務めた修道館中学の経営のために、主に東京で活動する様子が克明に記されている。

キーワード：渡部寛一郎 近代 政治 教育 漢詩

## 【解説】

「渡部寛一郎日記」(以下「日記」と略。「渡部寛一郎文書」松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵)の中、今回翻刻する部分には、①「全国中学校長会議列席ノタメ」の、一八九八年(明治三一)九月九日から一〇月八日まで三〇日間の東京出張の記録、②「学館用」による一八九九年(明治三二)六月一五日から七月一六日まで三二日間の東京出張の記録が収められている。

いずれも、往路は松江↓(大橋川・中海)↓境港↓(熊本丸)↓敦賀

↓(米原経由、鉄道)↓新橋、復路は、新橋↓岡山↓(人力車)↓米子

↓(中海・大橋川)↓松江の経路・手段を予定していたが、①の往路

では暴風雨による東海道線の寸断(『近代日本総合年表』第四版にも

「東日本に暴風雨……」とあり。本号掲載の大國由美子「渡部寛一郎

日記2(明治三十一年部分)注釈」参照、帰路は米子で予定していた

内海船に乗り遅れたため、安来まで和船を雇い、そこから人力車で帰

松しており、②の復路は、息子謙一郎に同行して、敦賀経由で帰松していた。

(二) 一八九八年の「全国中学校長会議」出席

「日記」では、渡部寛一郎は、九月一四日に文部省に出頭して会議の打合せを行い、翌一五日から二六日まで会議に出席したほか、江原素六(麻布中学校長)・園山勇(旧松江藩士・長野県知事)訪問、梅謙次郎の招待宴出席、「風教演芸会」観覧、修道館同窓会出席、帝国教育会の招待茶話会出席・加藤弘之講演聴講、音楽学校参観等の多忙な日程をこなしていた。

この全国中学校長会議の最重要議題は、九月一七日の「日記」にある「二種ノ中学校ヲ設クルノ可否ニ付、討議」し「一種論ニ可決」したことである。この点については、本号掲載の大國由美子の論稿が『東京朝日新聞』によって解説しているとおりであるが(『全国中学校長会議』の項)、国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第四卷(学校教育2、一九七四年)は、

明治三十年代から明治末にかけての中学校論の争点は、高等学校から帝大へ通ずる進学コースと、就職または専門学校へ入学する職業コースに、中学校を二分するかどうか集中している。(一〇四三ページ)

と概括し、教育雑誌の議論の大勢は、中学校が進学・就職の両面を兼ね備えることは困難との理由から「中学校の二分案に傾いていた」とした上で、渡部寛一郎が出席した全国中学校長会議の議論について、

一八九八年に開催された全国尋常中学校長会議では、「高等普通教育を施す爲及高等の学校に入学せんとする者の準備をなすが爲

に二種の学校を設くるの可否」(文部省の諮問案第一号)が審議され、「教育の本領に於て分離すべからざるもの」と「時期尚早し」を理由とした分離反対派が、一一〇人中八一人の圧倒的な支持を集めている。

……(全国尋常中学校長会議の)席上分離案が否決されたことは、二分案の推進に歯止めをかけ、それが中学校令改正(一八九九年)の中学校一元案提出の土台となったと考えられる。(一〇四四) 五ページ)

としている。

また、ここで言及されている一八九九年の「中学校令改正」は、「尋常中学校」を「中学校」と改称し、その目的を「男子ニ須要ナル高等通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス」と規定したが、その背景として、「実業学校が中等教育機関としてしだいに充実してきた」ことが指摘されている(文部省『学制百年史(記述編)』ぎょうせい、一九七二年)。

このような推移の中で、私立中学修道館は、全国的な中等教育制度の展開の中にその位置づけを得ていくのである。

(二) 一八九九年の「学館用」出張

一八九九年六月の東京出張は、「学館用」と題された「往復滞在共三十二日」に及ぶものであったが、その具体的内容は「日記」には記されていない。しかし、「日記」の記述では、松平直亮伯爵邸を、東京到着の翌六月一八日から離京当日の七月一〇日に至る二三日間に一三回訪問していること(その中の一回は鎌倉行き)、その訪問が「請願」「願書」に関するものであること、その間に文部省専門局(専門学務局)第二課属の古川恵を訪ねて「学館ニ関シ諸事ヲ打合」せてい

ることなどから、修道館にとつて極めて重要な出張であったことは確実である。このことを当該時期の「渡部寛一郎文書」と照らし合わせれば、この「請願」は、修道館存続の財政的基盤に関するものであることが、次の点から推測される。

第一に、修道館の財政基盤は、その前身の進取学館の時代から、生徒の授業料の外、寄付金・借入金によつて支えられていたことは、「渡部寛一郎文書」中の膨大な寄付金・借入金関係簿冊が示している。その借入先は、松江市内外の資産家・有力者とともに、松平直亮からのものが大きく、例えば、一八九八年二月二十六日には五〇〇円を借用していた（「明治参十老年起 要録 当借金返済顛末」）。このような財政事情の中で起死回生策は、修道館の維持・運営経費に県費の補助を得ることであった。

既にこの出張の前年、「控 明治三十一年七月 県費補助請願書（明治三十二年度補助ニ関スル分）」では、私立中学修道館長渡部寛一郎は、島根県内の中等教育に果たしてきた修道館の役割・意義を強調した上で、「旧松江藩主松平伯ヲ始メ地方有力者ノ援助」によつて今日の設備を得たが、経費を確保するのは容易でないとして年額一六〇〇円の県費補助を求めていた。これに対し、河野忠三島根県知事は、一八九九年（明治三二）五月二十六日、明治三二年度分として一二五〇円の補助を通知した。

この後、県費補助請願は毎年繰り返して行われ、一八九九年一〇月の請願額二六六四円八九銭対して明治三三年度分補助一五〇〇円、一九〇〇年一〇月二三日の請願額三〇〇〇円に対して明治三四年度分補助二五〇〇円など、明治三九年度分三五〇〇円に至るまで連年の県費補助を得ていた（「明治三拾老年以降 補助請願一途」）。松平伯邸

にほとんど日参して助力を得ようとしていた「請願」は、島根県知事に対する県費補助の継続に関連するものと考えられる。

この県費補助の認可に際しては、補助金の使途として、校舎増築費、教員俸給、教授用諸器具設備費が指定され、校舎に関しては四面・設計書の提出と知事の認可および竣成報告、教員については月俸四〇円以上の教員一名の設置、器具設備については購入目録の報告を義務づけていた。七月六日に「浅草七軒町教育品製造会社」で「器械購入方ヲ談判シ」、一二日に購入したのは、この補助条件を履行することでもあった。

「渡部寛一郎文書」中の教育関係文書は、私立中学修道館の組織と運営、教員と生徒、教育内容と設備等々を、その成立から廃止に至るまで詳細に説明することができる史料群であるが、その中に占める多くの寄付金・借入金・補助金関係文書は、修道館の維持・運営に文字通り心血を注いだ渡部寛一郎の苦心の跡を伝えるものである。

#### 〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」（松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵）から渡部寛一郎日記第二冊のうち、前半部を翻刻した。明治三十一年九月九日から十月八日、三十二年六月十五日から七月十六日までの上京日記が大部分を占め、他に会計、住所録、日記の書きかけ等が付されている。

一、原本は、黒革表紙の手帳で、横約一一・〇センチ、縦約七・五センチ、縦書き罫線付き、一頁十二行である。

一、読みやすいよう句読点を附した。句読点の付け方には統一的な基準はない。原文にまれに句読点が付けられているが、必ずしも本稿

のものとは一致しない。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、「」を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、訂正前を示したり、注記をしたりした。

一、適宜【】または\*を付して注記を補った。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追い込みとした。逆に読みやすいように、改行した部分もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。小字注は( )を加えて示した。

【渡部寛一郎文書 日記2】

明治卅一年九月、全国中学校長会議列席ノタメ、上京紀行略

九月九日 好晴

午前九時過、新快漕丸ニ搭乗、松江発、十一時境着。香川方ニ投シテ昼食。敦賀行熊本丸、黒烟ヲ吐キツ、我輩ヲ迎フカ如シ。此行、凶ラス、同行者数名ヲ得タリ。山本邦之助氏祖父、渋川千之助、大谷氏、山根豊市、其他、併セテ八名。一同抵掌、大ニ欣ヒ、喫食早々、端艇ニ投シ、三時搭乗セシカ、同卅分頃ヨリ、徐々拔錨、出行セリ。海上、無比ノ静穏タリ。

九月十日 好晴

午前七時、敦賀着。朝飯ヲ喫セシカ、爰ニ一行ノ失望セルコトハ、東海道汽車不通ノ一事トス。人間万事全善ヲ得カタシト、種々評議ノ末、小憩ノ后、米原行ノ汽車ニ投シ、午後三時着。十一時当地発夜汽車ニ投スルコトト為シ、喫飯後小憩ニ評決セリ。

九月十一日 好晴

午前十時過、小山着。此地ヨリ山北マテ、凡ソ二里半、鐵路破損、汽車不通。行客皆歩行セサルヲ得ス。依テ、小山ニテ昼飯ヲ喫シ、零時過、出発。四時半頃、山北着。此間、道路ハ多ク山腹ニ在ルヲ以テ、高低不当、歩行頗艱ム。五時過、山北発、大磯泊。

九月十二日 晴

午前九時、大磯発。同卅分、平塚着。此地ヨリ、茅ヶ崎間ニ、馬入川アリ。渡シアリ。鐵路破損ノ為メ、汽車不通。依テ、荷物ハ通運ニ托シ、腕車ヲ命シテ、茅ヶ崎ニ至リ、一行ノ揃フヲ待テリ。時二時過キトス。五時過、茅ヶ崎発。十時、新橋着。腕車ヲ命シ、牛込南町二七番地ニ投宿。

新橋迄同行者

邦之助祖父

山本宗連

大学生 高藤直太郎

〃 島田

〃 三浦菊右衛門

〃 伊藤恵市

茶町人 樋野唯一

書生 馬場

大学生 渋川千之助

東京人 村岡セイ

外娘一人六才

高知県人 女子弐人

お角 お常 岩崎家女中

メ十二人

九月十三日 陰 午後小雨

午前、山本邦之助ヲ五番町二番ニ訪ヒ、老人ヲ慰ス。転シテ、本庄氏ヲ飯田町飯田館ニ訪フ。不在。南神保町、杵野方ヲ訪ヒ、転宿ノ事ヲ約ス。午後、謙一郎ト同伴、榎氏ヲ訪ヒ、夫ヨリ京橋区ニ至リ、簸川中学校長横澤氏ヲ訪フモ、未着。帰路、聯歩シテ、神田区ニ歸リ、西洋料理ニテ晚餐ヲ喫シ、一ト先矢田方ニ歸リ、荷物ヲ携ヘテ、杵野方ニ移転ス。謙一郎ハ別レテ、直ニ寄宿舎ニ歸ル。時、午後七時過トス。

九月十四日 降雨

午前六時、車ヲ飛テ、片山氏ヲ其邸ニ訪フ。同氏微恙、引籠中ニ付、臥蓐ノ儘、面会。帰途、塩谷氏ヲ訪ヒ、夫ヨリ転シテ、文部省へ出頭。会議ノ事ヲ打合セテ、帰宿喫飯。(午后謙一郎来ル。夕飯ヲ共ニス。)

九月十五日 降雨 午后晴

午前九時、会場へ出頭。十時過、開会。尾崎大臣ノ挨拶ニ代フル演説マテ閉会。午后、松平家訪問、帰途、矢田方へ廻リ、千代并謙一郎ヲ同伴、帰宿。夕餐ヲ共ニス。

九月十六日 晴

午前八時、会場へ出頭。此日質問会ニテ、十二時前閉会。(午后一時、

矢田方ヲ問フ。) 午后五時過、池田守吉氏来訪。晩酌ヲ共ニス。

九月十七日 夜雨 昼晴

午前八時、出頭。二種ノ中学校ヲ設クルノ可否ニ付、討議。正午ニ至リ、閉会。一種論ニ可決。午後、田代謙一郎来訪。夕刻、広島明道中学校主、島末氏来訪。相携テ、同業者懇話会ニ赴ク。会場ハ神田明神内開化楼トス。

九月十八日 快晴

朝来、千代、謙一【郎脱か】来訪。其他来客。米田穰、山本庫次郎、武部繁之助、杵崎友一郎。午後、謙一郎同伴。目次氏ヲ訪ヒ、夕飯ノ饗応ヲ受ク。

九月十九日 晴

「」氏ノ案内ニテ、風月堂ニテ昼飯。了テ、島田三郎氏ヲ新聞社ニ訪フ。

同 廿日 晴

同 廿一日 晴

午前、江原素六氏ヲ麻布区島根坂ニ訪ヒ、帰途、園山長野県知事ヲ芝口聚星館ニ訪ヒ、九時過キ会議ニ出頭。同日午后六時ヨリ、梅氏ノ招待ニテ、濱町常盤楼ニ至ル。同席者如左

大学教授富井氏

日本銀行理事薄井氏

元司法次官高木豊三氏

愛知銀行員平根氏

同郷人岸清一氏

此外余ト主人ヲ併セテ七人トス。

九月廿二日 晴

例刻、会議へ出頭、会議。了テ、一同本省内ニテ写真。夫ヨリ、錦暉館ニテ懇親会ヲ開ク。大臣、次官、局長ヲ始メ、高等官、并嘉納高等師範学校長モ臨席セリ。午後四時ヨリ、学制研究会ノ招待ニテ、帝國教育会講堂ニテ開キシ【シは衍字か】タル同会臨時会ニ出頭ス。

九月廿三日 雨

午前、在宿。千代、謙一郎、西山等来訪。午餐ヲ共ニス。午後、神田美土代町青年会館ニテ開キタル風教演芸会ニ臨ミ、帰途、神田青柳亭ニ催フシタル修道館同窓会ニ臨ム。此夜、山本邦氏来訪。相携テ西洋料理屋ニ至リ、夕飯ヲ共ニス。

九月廿四日 半陰半晴

午前、会議。午後二時ヨリ、帝國教育会ノ招待ニテ、臨時開キタル茶話会ニ臨ム。加藤弘之先生、風俗改良論ノ講演アリ。終ニ利他ハ畢竟利己ニ歸スル理由ヲ述べラル。其由来ニアリ。感情、智力、……

九月廿五日 雨

午前、会議。午後、音楽学校ノ招待ヲ受ケ、參觀。同四時ヨリ数学院。上野清ノ招待ニテ明神境内開化楼ニ至ル。

九月廿六日 雨

午前、會議。十一時過、閉会。尾崎大臣出席、閉会ノ挨拶ヲ為ス。午後、松平母里公ヲ訪ヒ、夫ヨリ伯爵邸ニ至リ、夕餐ノ饗応ヲ受ケ、伯爵下対酌。六時ヨリ十時ニ至テ、退出。

九月廿七日 半晴

午前、松平広瀬公ヲ訪ヒ、帰途、榎氏ヲ訪ヒ、對話数刻、帰宿。偶、千代子来訪。相携テ、芝増上寺參詣。近傍散歩ノ后、京橋之畔松田楼ニテ、昼飯ヲ共ニシテ、帰宿。大谷父子来訪ス。

九月廿八日 晴

午前、鮫橋松平邸ニ至リ、前日ノ挨拶ヲ為シ、了テ、山口氏ヲ其邸ニ訪ヒ、談話数時。夫ヨリ、車ヲ命シ、安井泉氏ヲ赤十字社病院ニ慰問シ、同所ニテ昼飯ヲ喫シ、病院内ヲ一覽ス。夕刻、謙一郎来訪。相携テ、小川町常盤亭ニ至リ、一酌、且夕飯ヲ共ニシテ、帰宿。

九月廿九日 雨天

午前、八時。岸清一氏ヲ芝桜川町寓所ニ訪ヒ、夫ヨリ、靈岸島商船学校參觀。帰途、野津金之助氏ヲ新堀町東洋汽船会社ニ訪ヒ、零時過、帰宿。午後、矢田方ニ至リ、晚酌、一泊。此夕、晚酌ヲ共ニセシ者、矢田夫婦、謙一郎ノ外、柴田、板持二氏トス。

九月卅日 晴 黄昏ヨリ小雨

午前、矢田方ヨリ出宿。高木豊三氏ヲ訪ヒ、夫ヨリ、清水、木村、大谷諸氏ヲ歴訪シ、後日本銀行ニ至リ、理事薄井氏ニ面会、同行内ヲ一覽ス。午后、数学院ヲ訪ヒ、上野清氏ニ面談。夫ヨリ、西村茂樹翁ヲ其邸ニ訪ヒ、帰途、目次氏ニテ、晚餐ヲ喫シ、了テ、杵原氏ヲ訪ヒ、一酌シテ帰宿。

拾月一日 降天

午前八時、松平家ヲ訪ヒ、告別。他二三家ヲ歴訪シ、后、文部省ニ至リ、次官ニ面会、告別。片山、木村ト昼餐ヲ共ニスルコトヲ約シテ、帰宿。尋テ、二氏至ル。相携テ松本楼ニテ約束ヲ果ス。午后、梅氏他一二氏ヲ訪ヒ、帰宿。旅装ニ着手ス。此夕、来訪、矢田夫婦、柴田、板持、杵崎、渡部林、市川、野津、謙一郎等数人トス。留別ノ為メ、一酌ヲ催セリ。

九月【十月の誤り。以下同様】二日 降天、午後小晴

午前九時過、出宿。十時、新橋発汽車ニテ品川着。此地ニテ見送り

シ者、謙一郎ノ外、柴田、板持ニ氏トス。昼飯ヲ共ニシ、午后六時、大坂直行ノ汽車ヲ待テ、別ヲ告ク。休息中、泉岳寺ニ参詣、四十七士ノ墓ヲ参拝ス。

九【十一】月三日 晴

午前七時過、汽車米原着。車中、朝飯ヲ喫シ、十一時前、大坂着。車ヲ駆テ、善繼寓所ニ投宿ス。

九【十一】月四日 半晴半陰

午前、車ヲ駆テ、諏訪善子ヲ川口フル女学校ニ訪フ。十有余年ノ久瀾ヲ叙シ、且、同人案内ニテ校内ヲ巡視シ、帰途、内田愼氏ノ寓所ヲ尋テ、数時間ヲ費シタルモ、遂ニ覩ルヲ得ス。帰宿。昼餐ヲ喫シ、善繼家族ニ告別シテ、梅田停車場ニ向フ。午後三時、三宮着。直ニ山崎方ニ投宿。此夕、段塚氏來訪。

九【十一】月五日 晴

午前、海岸散歩。帰途、関根寓所ヲ訪問ス。午後、和田崎へ散歩。水族館并和楽園ヲ一覽ス。此日、山本邦氏郵書至ル。

九【十一】月六日 晴

午前ヨリ、山崎、段塚ニ氏ト相携テ、須磨明石ヲ遊覽ス。先、須磨ニテ下車。須磨寺<sup>ニ</sup>参詣シ、敦盛遺物其他宝物ヲ一見ス。夫ヨリ舞子マテ、徒歩シ、復、汽車ニ投シテ、明石ニ至リ、衝濤館ニ投宿。昼飯ヲ喫シ、且一酌ス。館ノ風景頗ル明美。難筆紙。喫飯后、人丸神社ニ参詣、明石旧城址ヲ一覽シテ、汽車神戸ニ帰ル。五時過トス。段塚氏、明石ヨリ、一車先ニ、帰神シテ、関根、中村ニ氏ト相謀リ、晚餐饗応ノ用意ヲ為ス。六時ヨリ、段塚氏ノ案内ニテ、花月亭ニテ、同氏及関根、中村三氏ノ饗応ニ預ル。対酌、對話、十時ニ至テ退席。同十一時卅五分迄ノ汽車ニテ発程。

十月七日 晴

未明、岡山着。朝飯ヲ喫シ了テ、直ニ車ヲ命シテ、発程。西川昼飯、勝山ニテ一泊。

十月八日 晴

午前七時、勝山発。新莊【現在の地名表記は庄】ヨリ鼻引ヲ雇ヒ、急行。根雨、昼。四時十五分、米子着。汽船、既ニ出帆后ニ付、直ニ和船ヲ雇ヒ、安来ニ渡リ、同地車引。午后九時過、無異帰着。

此行九月九日ヨリ、十月八日至ル、計三十日間ノ旅行トス。而シテ東京滞留日数ハ二十日トス。

卅一(三十一)年

十二月十四日調査

日計 = 123,322

会費 = 9,718

惣計 = 133,040

内訳

館長 = 79,800

館 = 42,000

□ = 5,000

出大 = 1,200

渡□ = 0,720

現金 = 4,320

卅二年頃県外礼状

東京

○秋原、○榎、○木村、

○片山、○早乙女、○清水、

○目次、枚崎友、柴田柴、

池田守吉、

○西村先生、

小石川表町一〇九

○井上先生

警視庁

○大浦兼武、○三村友藝、

○浅井郁太郎、○柳多元、

○和田豊

○関根汀二 門司郵便局官舎

○松岡成高

○狭間重画

中本章三 長崎市十人町一八、

明治卅二年四月調

○大坂西区江戸堀上通一丁目一一八、(尼ヶ崎橋西詰西入南側)

弁護士 竹田廣助

○大坂市東区南本町四丁目四八〇

内田文太郎

京都市寺町通荒神口上ル東入ル宮垣町

本荘太一郎

○同下切通新烏丸東入四二 沢野氏

○大坂市西区九条二番道路二丁目橋東北入ル

渡部善継

○東京小石川区原町一三三、

矢田長之助

○同麻布区桜田町七二

桑原羊次郎

浅草老松町三番地

石井信敬

卅二年六月学館用ニテ出京記

六月十五日晴天 東南微風

午前九時五十分 松江発

同十二時前 境着

午後六時五十分前 境発

同六時四十分 熊本丸乗込

同八時 出帆

六月十六日 晴天微風

朝飯昼飯共船ニテ

午後十二時過敦賀着

敦賀 零時過着

大黒屋支店ニテ小憩

午後二時五十九分乗車

敦賀発

同 四時四十分 米原着

同 五時廿分 米原発

同 八時 名護屋停

車中夕飯ヲ喫ス。

六月十七日 陰天 正午後晴暑甚シ

午前<sup>六</sup>五時、御<sup>国</sup>殿場停車場中、朝飯ヲ喫ス。午前八時四十九分、新橋着。直ニ腕車ヲ駆テ、小石川区原一三三矢田方ニ投宿ス。敦賀マテ同船者ハ数人アリシモ、同所ヨリ同車シテ入京シタル者ハ、柳原、西田美津穂兄妹ト、増田力、本町商人湯原某ト四人ナリ。

六月十八日 晴風アリ

朝、松平邸訪問。安井、山口両氏ヲ訪モ、皆不在。伯様、此朝出發、鎌倉後ニテ、拜謁ヲ得ス。午後ヲ約シテ、一ト先帰宿。○独歩ニテ、本郷大学近傍ヘ散策ヲ試ミ、帰テ昼飯ヲ喫ス。○午後四時過山本邦氏、偶然來訪。數刻談話。相携テ、水道橋近傍ニ至リ、別ヲ告ケ、飯田町ヨリ汽車ニテ松平邸訪問。安井氏ニ面晤、事情陳述、願意ヲ通ス。夕飯ノ饗応ヲ受ケ、山口氏ノ出頭ヲ待チ、夜深ニ至ルモ、面晤ノ機ヲ得ス。依テ、明朝ヲ期シテ辞去。帰宿、十一時過ナリシ。

六月十九日 晴

○早朝、松平邸訪問。山口氏ニ面晤。事情陳述スルコト、安井ニ於ケルカ如シ。對話零時ヲ過キ、午飯ヲ饗セラレ、二時過辞去、帰宿。○夕飯后独歩散策。本郷ヨリ神田ノ夜店ヲ通覽シテ、十時過、帰宿。

六月廿日 晴 午後雨

終日、在宿。夕刻、謙一郎來訪。共ニ附近散歩。牛肉□野菜類并雜品購帰リ、三人鼎坐、夕飯ヲ喫ス。此日、暑氣甚シ。

六月廿一日 陰雨冷氣ヲ覺

終日蟄居ス。夕方謙一郎來訪。三人会食ス。

六月廿二日 陰雨

午前、松平邸訪問。安井氏ニ面談。十一時過、帰宿。

六月廿三日 陰雨

午后四時、松平邸訪問。安井、山口二氏ニ面話。鎌倉ヨリ何時來訪候モ差支ナシト申來レル由、通セラル。依テ、明廿四日伺候スルヲ約シテ、帰宿。

六月廿四日 陰天雨ナシ

午前八時卅分、新橋発。汽車ニ乗込ミ、鎌倉ヘ行き、松平伯ヲ島津公別邸ニ訪問シ、昼飯并間食ノ饗応ニ預リ、十時過ヨリ、午後五時ニ至マテ、伯爵ト対<sup>※</sup>話、種々談話ノ前后ニ於テ、請願ノ件ニ関シ事情ヲ詳陳シテ、辞去。六時十五分、鎌倉発ノ汽車ニテ、帰京。帰宿セシハ十時過ニテアリシ。

六月廿五日 半晴半陰

午前、松平邸訪問。安井、山口両氏ニ面會。前日、鎌倉ノ狀況ヲ報告シ、昼餐ノ饗応ヲ受ケテ、一時過、帰宿。武部氏來訪對話。數時酒肴ヲ饗シテ、共ニ久瀾ヲ叙ス。夕刻、秋上氏來訪。共ニ神田本郷辺ヲ散策シテ帰ル。

六月廿六日 半晴半陰

在宿。數通信書ヲ認ム。此日、学校ニ関スル中村氏ノ信書到ル。夕飯后、謙一郎ニ案内セシメテ、木邨峰氏ヲ水道町寓所ニ訪フテ、帰ル。

六月廿七日 晴

午前、千代母子、謙一郎等、相携テ、神田町淡路町江木方ニ至リ、合写。終テ、小川町東明館勸工場通覽。帰途、錦町今用西洋料理店ニ

テ、昼飯ヲ喫シテ、帰宿。午后、喫飯。了テ、片山吉則氏ヲ本郷金助街九番地寓所ニ訪フテ帰ル。

六月廿八日 晴

午前、松平邸訪問。山口、安井二面会シ、願書之件ニ就キ、明廿九日午後再訪ヲ約シテ、辞去。帰途、斎藤熊氏ヲ日本橋区学海指針社ニ訪ヒ、久瀧ヲ叙シ、相携テ同区浜町井筒屋ニテ小酌ヲ催シテ、九時過、帰宿。

六月廿九日 晴

午前、数藤、広江両氏ヲ訪問ス。午后、約踏テ、松平邸ヲ訪問ス。願書ノ件未定ニシテ帰ル。

六月卅日 陰天 黄昏ヨリ雨

午前六時ヨリ、車ヲ駆テ、梶山視学官ヲ牛込神楽坂三丁目寓所ニ訪問シ、夫ヨリ松崎故一郎氏ヲ、麻布仲ノ町寓所ニ訪問、共二面話。帰途、芝区桜川町岸氏ヲ訪フ。不在、夫ヨリ日本橋区新堀町東洋汽船会社ニ至リ、野津氏ニ面話。十二時帰宿。午后、目次氏方訪問。遂ニ一泊シテ、帰宿。

七月一日 晴

午前、目次氏ヨリ一旦帰宿。更ニ車ヲ命シテ、文部省ニ出頭<sup>シテ</sup>、先、木村氏ニ面会シ、終テ、専門局第二課属古川恵氏ニ面会シテ、学館ニ関シ諸事ヲ打合ヲ為シ、帰途、松本肉店ニテ昼飯ヲ喫シテ、帰宿。

七月二日 晴

終日、在宿。此日、来訪者、午前、士官補候生原勝三郎、幼年生片寄文郎トス。午餐ヲ饗ス。午后、野津金之助、松崎故一郎氏○山本邦之助夫婦(新婚披露ノ為メ)、要塞砲兵少尉野村繁諸氏ニシテ、小酌ヲ催シ、且晚餐ヲ饗ス。

七月三日 陰

午前七時、出宿。松平邸訪問。出願之件ニ付、協議催促、尚不決。他日ヲ約シテ、帰宿。午后廣江氏来訪。

七月四日 晴

午前八時頃、出宿。先、上野公園ニ至リ、動物園ヲ一覽。了テ、商品縦覧所ヲ一覽。正午ヲ過クルニヨリ、上野前雁鍋屋ニテ昼飯ヲ喫シ、当所ヨリ、鉄道馬車ニテ、浅草公園ニ至、園内ヲ徘徊。氷店ニテ小憩后、役者踊ノ寄席ヲ一覽シ、尚浅草動植物園ヲ一覽。園内五階樓ニ登遊シ、蓄音器ニテ数種ノ流行節ヲ聞キ、了テ、再ヒ公園前ヨリ馬車ニテ、上野ニ至リ、上野ヨリ人力車ヲ命シテ、帰宿セシハ、正二六時ニテアリシ。

七月五日 晴

午前、上代謙藏来訪。午後、松平邸出願之件、未決定ニテ帰宿。

七月六日 陰 時々小雨

午前、浅草七軒町教育品製造会社ヲ訪ヒ、器械購入方ヲ談判シ、帰途、石井信敬氏ヲ同区老松町三番地ニ訪ヒ、同氏夫婦并娘三人ニ面会。共ニ久瀧ヲ叙ス。氏ハ嘗テ我県ニ勤務中懇親セシニヨル。零時前、帰宿。此日千代、春子ヲ携テ、終日他出セシニヨリ、謙一郎ト二人留守シテ、昼晩両度ノ料理ハ専ラ謙一郎ノ配剤ニテ、喫食セリ。亦閑中ノ一興トス。呵々。但、此日偶飯米乏キ為メ、晩食ハ(パン)ニテ相仕舞候。

七月七日 陰雨

午前五時頃ヨリ、六時ノ間ニ地震アリ。但、三回。安井氏ヨリ回答ノ件ニ付、来邸スヘキ旨、通知ニ接セシニヨリ、昼飯早々、訪問。出願ノ件全ク決定ス。(金二百円領収) 帰途、迂回シテ、麻布桜田町

七二桑原羊次郎寓所ヲ訪フ。不在。空ク帰宿。

七月八日 半陰半晴

午前六時発、上野ヨリ、汽車ニテ、長野ニ向テ、直行。午後三時過着、先、園山知事ヲ官舎ニ訪フ。出張不在ニテ失望。依テ、足立敏氏ヲ其寓ニ訪フ。原林、野津左馬氏、皆同宿セルヲ以テ、一揖ノ后、相携テ善光寺境内其他ヲ散步シテ、藤屋本店ニ投宿。三氏皆来話。小酌ヲ催シ、了テ就寢。

七月九日 風雨冷氣甚

午前六時卅分、長野發汽車ニテ、帰京。

七月十日 陰雨冷氣甚

午前、文部省ニ出頭。木邨、片山、古川ニ告別シ、且古川氏ニ打合ヲ為シ、帰途、明治義会塩谷吟策氏ヲ訪ヒ、談話ニ時ヲ移シ、午餐ノ饗応ニ【ヲか】受ケ、一旦帰宿。午后六時ヨリ、安井、山口ニ氏ヨリ招カレ、告別旁、参邸。四谷仲町蓬萊亭西洋料【理脱字か】ノ饗応ニ預リ、帰宿。

七月十一日 午前小雨午後晴

午前、棟氏ヲ訪ヒ、談話ニ時ヲ移シ、帰途、器械購入方ニ付、打合ノ為メ、塩谷氏ヲ訪ヒ、正午、帰宿。午后、購入物ノ為メ、千代同伴。神田ヨリ、日本橋ヲ巡遊シテ、帰宿。林視学官着京ヲ報道シ来レルニヨリ、晩飯后、同官宿所へ訪問。将来ノ事ヲ打合セテ、帰宿。出發ノ用意ニ着手。

七月十二日 晴

午前八時ヲ期シテ、松崎氏ト浅草七軒町教育会社ニ至リ、購入。談判ヲ為シ、代金払後、荷造之際、物品点検方ヲ松崎氏ニ托スルコトニ談合シテ、帰宿。發程ノ準備ニ着手。但、松崎氏同伴シテ、帰宿。一

酌ヲ試ム。午前十一時四十分、出發。午後十二時卅分、新橋發。汽車ニ乗シ、神奈川ニ着。山本邦之助氏ヲ訪問（松崎氏送テ新橋ニ至ル。）同二時卅分、神奈川發。鎌倉ニ立寄、松平伯ニ告別シ、同地六時十五分發。大船ニ至リ、（同地七時十一分發）急行下り列車ニテ出發。大坂ニ向フ。大船ニテ謙一郎等ト同車。

七月十三日 晴

午前六時過、米原ニテ、謙一郎等ト相別レ、彼ハ敦賀ニ、余ハ大坂ニ向ヒ、午前十時過着。直ニ、西区九条番外善繼寓所ニ投宿。対座、久瀨ヲ叙シ、昼飯ノ上、一酌ヲ催シ。凶ラス、快酔セリ。（此際敦賀ヨリ出船ノ打電ヲ為ス）。酔ニ乗シ、日中ニ不拘、善繼ト同伴、寢衣ノ儘、团扇巻本ヲ携ヒ、付近ヲ散歩シ、遂ニ車ヲ雇ヒ、難波停車場ニ至リ、汽車ニテ、天下茶屋へ遊ヒ、処々徘徊ノ后、茶店ニ小憩。氷水三椀ヲ喫セシカ、酔余、渴ヲ覚ユルノ際、其妙。真ニ望外ニテ、思ハス快哉ヲ同呼シテ、一笑セリ。五時過帰宿。此日、暑熱甚シ。夕刻、驟雨。一陣為メニ稍涼ヲ覚ユ。

七月十四日 快晴

此日、早朝、出發。陸路、帰国ノ予定ナリシモ、前日謙一郎ヨリ、十五日、敦賀出帆ノ電報ヲ送りシニ付、同地へ引返シ、謙一郎等ト同船帰国ノ事ニ決定。午前八時卅分、大坂發ニテ、敦賀ニ向ヒ、午后二時四十分着。

七月十五日 快晴 暑氣甚

午后三時、栄城丸乗船。五時、出帆。海上静穩無比。同船者、謙一郎外、山田恒、木村林、等、東京并金沢ヨリ帰省。学生諸氏拾数人トス。

七月十六日 快晴 暑氣甚

午前九時、境入港。此時、余、生十四人、学館端艇ニテ出迎居タリ。

依テ、直二便乗シテ、香川ニ投宿。一同へ昼飯ヲ饗シ、休憩后、四時  
発汽船ニテ、帰松。此行、往復滞在共三十二日ヲ費セリ。

近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文学と  
日本史学の学際的研究（研究課題／領域番号 16K02366 期間

大原

二〇一六―二〇一八年度 研究代表者 要木純一）  
による成果の一部である。

須賀

塩野仙六

同

薦沢

塩野房四郎

同

同

塩野長右衛門

明治三十二年八月廿三日発隠岐航行略記

八月廿三日

【中斷 以下白紙】

〔付記〕

本稿は、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト

近代山陰の政治と文化―「渡部寛一郎関係文書」・「若槻礼次郎関  
係文書」に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して―（課題番号

一四〇一 期間 二〇一四―二〇一五年度 代表 要木純一）  
及び、

科研費 基盤研究（C）

## Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou: 1898-99

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

### [Abstract]

Watanabe Kanichirou (1854 – 1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1898-99. Through this diary we can perceive how he as the principal of Shudokan school devoted himself to develop his school and made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats.

Keywords : Watanabe Kanichirou, education, Meiji era